

Freude

vol. 18-24 2025. 5. 7 wed!

5/4 G/C) 18:30 小田川
 ↑ あいせり
 21 G/C) 18:30 小田川
 28 G/C) 18:30 小田川
 6/4 G/C) 18:30 聖母の教会

ハイドンの後期六大ミサのお勉強 (ハイドン大好き親父、風街ろまん、ウィキ等のネットうけり)

ハイドン (1732~1809) 作曲のミサは 13 曲。そのうち、7 曲は 1782 年までに作曲された。オーストリアの君主ヨーゼフ二世が、教会の勢力をそぐために、多くの修道院を閉鎖したのは、1782 年頃であり、その後、ハイドンは、教会音楽を作曲していない。ヨーゼフ二世が亡くなる 1790 年まで、ハイドンだけではなく、モーツァルトを始め、他の作曲家も教会音楽の作曲をしない時代となった。ハイドンは、ロンドンでの演奏会もあり、1795 年まで忙しくしていた。ハイドンが仕えるエステルハージ家 4 人目の当主ニコラウス二世は、ロンドン滞在中のハイドンに、また楽長として戻って来てほしいとの要請をし、そこでハイドンが楽長としてエステルハージ家の学長として復帰したが、それまでの間は、ハイドンは、教会音楽から遠ざかっていた。

ニコラウス二世は、教会音楽に関心があり、侯爵夫人であるマリア・ヘルメネギルトの命名日の祝祭のために、毎年新しいミサ曲を作曲する事を、ハイドンに命じた。そこで、1796 年から 1802 年まで、毎年一曲ずつ、新しいミサ曲がハイドンにより生み出された(なお、1796 年に 1797 年の分含めて 2 曲作曲しており、また、1800 年にはミサ曲の作曲を行っていない)。

♪ハイドン後期六大ミサ ①作曲年 ②背景 ③編成

●Hob. XXII : 9 「パウケン・ミサ(Missa in Tempore Belli, Paukenmesse)」ハ長調

①1796 年 ②ハイドンにとってほぼ 14 年ぶりのミサ曲。最新の研究では、Hob. XXII : 10 「ハイリッヒミサ」の方が先に作曲されたと考えられている。アニュス・デイにティンパニのソロがあることから、「パウケン (太鼓) ミサ」と呼ばれている。また、作曲当時、ハプスブルク家は第一次対仏大同盟の一員としてフランスと交戦しており、「戦時のミサ」の呼称は当時の状況を反映している。この曲を含む、ハイドンの後期ミサ曲 6 曲は、交響曲の作曲を全て終えたハイドンにより、より交響曲の手法が取り入れられ、ハイドン研究家の H.C. ロビンス・ランドンは「ミサの言葉を用いた、声楽とオーケストラのための交響曲」と名付けている。

③ フルート(1)、オーボエ(2)、クラリネット(2)、ファゴット(2)、ホルン(2)、トランペット(2)、ティンパニ、弦楽合奏、オルガン。独唱 : S, A, T, B。 合唱 : 4 声部。

●Hob. XXII : 10 「ハイリッヒミサ(Missa Sancti Bernardivon Offida, Heiligmesse)」変ロ長調

①1796 年 ②正式名称を『オフフィダの聖ベルナルドのミサ』(Missa Sancti Bernardi von Offida)という。オフフィダのベルナルドは 17 世紀のカプチン・フランシスコ修道会の僧で、1795 年 5 月 19 日に教皇ピウス 6 世によって列福された。その聖名祝日である 9 月 11 日が、エステルハージ侯爵ニコラウス 2 世夫人マリア・ヘルメネギルトの聖名祝日である 9 月 8 日に近いため、両人を兼ねて賛美するためにアイゼンシュタットのベルク教会(Bergkirche)で初演された。自筆楽譜では『パウケン・ミサ』も同じ 1796 年に書かれており、どちらが先に作曲されたかについては議論が分かれるが、ジェームズ・ウェブスターによると『ハイリッヒミサ』の方が先で、『パウケン・ミサ』は 1796 年秋以降に作曲され、同年 12 月 26 日にウィーンで初演された。「ハイリッヒ」とは、本曲のサンクトゥスの中にオーストリアの古い教会音楽「Heilig, heilig, heilig, du

bist allzeit heilig」が引用されていることによる（ハイリッヒはサンクトゥス（聖なる）に相当するドイツ語）
③オーボエ(2)、クラリネット(2)、ファゴット(2)、ホルン(2)、トランペット(2)、ティンパニ、弦楽合奏、オルガン。独唱：S, A, T, B。 合唱：4声部。

●Hob. XXII：11「ネルソン・ミサ(Missa in angustiis, Nelsonmesse)」ニ短調

①1798年 ②作曲中に、ナポレオン艦隊を打ち破ったイギリス海軍の名将ネルソン提督と結び付けられて、「ネルソン・ミサ」と呼ばれているが、まず、angustiisという言葉は、不安、困難、狼狽という意味があるので、当時の社会情勢から、日本では、「不安な時代のミサ」と訳されている。しかし、angustiisは、狭い所という意味もあり、かなり短期間で、このミサ曲を作曲したという伝記により、「短期間で作曲したミサ」という説、さらに貧困という意味もあり、作曲当時の楽器編成が、大変簡素なため、当時は、エステルハーザ家の楽団員が不足していた事も考えられ、「不足した楽器編成によるミサ」という説も。短調で作曲されており、出だしから劇的な要素を持つミサ曲。

③初版は、トランペット(3)、ティンパニ、弦楽合奏、オルガン。その後、1803年に第二版として、フルート(1)、オーボエ(2)、クラリネット(2)、ファゴット(2)、ホルン(2)を付加した形で出版されている。

独唱：S, A, T, B。 合唱：4声部。

●Hob. XXII：12「テレジア・ミサ(Theresienmesse)」変ロ長調

①1799年 ②おそらくフランス2世の皇后マリア・テレジアのために作曲されたと考えられたためにこの名があるが、実際にはこの時期のほかのミサ曲と同様エステルハーザ侯爵ニコラウス2世夫人マリア・ヘルメンギルデのために作曲され、同年9月8日の夫人の聖名祝日で初演された。ロンドンによれば、同じころハイドンはマリア・テレジアのために『テ・デウム』(Hob.XXIIIc:2)を作曲しており、そこから混同がおきたのかもしれない。『ネルソン・ミサ』が作曲された1798年にエステルハーザ家の楽団には管楽器奏者がひとりもいなかったが、1800年に8人に増員された。本曲でもトランペット以外の管楽器の活躍は少ない。

③クラリネット(2)、ファゴット(1)、トランペット(2)、ティンパニ、弦楽合奏、オルガン。

独唱：S, A, T, B。 合唱：4声部。

●Hob. XXII：13「天地創造・ミサ(Schöpfungsmesse)」変ロ長調

①1801年 ②1801年はオラトリオ『四季』を完成した年にあたる。本曲は1801年7月28日に作曲を開始し、9月13日にアイゼンシュタットのベルク教会で初演されたが、すでに70歳近い老齢のために作曲ははかどらず、初演の2日前になっても完成しなかった。グロリアに、オラトリオ「天地創造」のアダムとイヴの二重唱の旋律が使われているため、「天地創造ミサ」と呼ばれている。前作の『ネルソン・ミサ』や『テレジア・ミサ』では管楽器奏者が不足していたが、この曲ではふんだんに管楽器が使用されている。

③オーボエ(2)、クラリネット(2)、ファゴット(2)、ホルン(2)、トランペット(2)、ティンパニ、弦楽合奏、オルガン。独唱：S, A, T, B。 合唱：4声部。

●Hob. XXII：14「ハルモニー・ミサ(Harmoniemesse)」変ロ長調

①1802年 ②ハイドンの作曲人生における最晩年の作品であり、ハイドンが完成させた最後の大規模作品。伝記によると作曲に7カ月も要した。ハイドンは、この『ハルモニー・ミサ』を「骨の折れるほど苦労して作った」と言っている。「ハルモニー」とは管楽器のことで、本作では管楽器が最大規模に達している。1802年9月8日にアイゼンシュタットのベルク教会で初演された。

③フルート(1)、オーボエ(2)、クラリネット(2)、ファゴット(2)、ホルン(2)、トランペット(2)、ティンパニ、弦楽合奏、オルガン。独唱：S, A, T, B。 合唱：4声部。